

登校・登園と子どもたち

新学期が始まりました

お宅のお子さまは、元気に保育園や幼稚園や学校へ行っていますか。

「はい」と答えられる父母は、ほっとしている五月だと思えます。

「それが、ちよつと・・・」という父母は、五月の先の梅雨空のような気分です。

それは、以前からよくいわれている『五月病』という時期なのです。登校(登園を含めて)をしぶったり朝のかけがさっぱりしなかつたりする時期なのです。

でも、いま言われている不登校児や登校拒否などと短絡的にきめつけないでください。

五月という時期についてじっくり考えてみましょう。

新学期の四月は、子どもたちは、希望やロマンをもって登校します。小学一年生などでは、毎日毎日、「せんせい、あのね」と語りかけてくれるのです。

でも、一方では、大人の想像以上に緊張した毎日を過ごしているのです。

さらに、今までとはちがった友だちともお付き合いしなければな

りません。さらに、担任も代わったとなると大変なことです。

そんな、期待とロマンと緊張の中で過ごしたのが四月でした。

これは、子どもに限ったことではありません。この春、社会に巣立った成人にとっても同じような四月なのです。

ちよつぱり疲れました

四月を表面的には、無事に過ごした子どもたちも、本当は少々疲れぎみなのです。それは無理のないことなのです。

だから、子どもたちの気持ちのどこかに「ちよつぱり疲れました」というせつない訴えがあるのです。

もし、そんな時の子どもたちの状況を大人であるわたしたちが分かってやれて、「ほんとに、よくがんばったから疲れているんだね」と共感できたとしたら、子どもたちはきつと楽な気持ちになるでしょう。

ところが、一般的には、「学校は行くことが当たり前」という前提だけに見てしまいがちです。

それは、親も地域も教師も友だちもそう思っているからなおさら



子どもにとっては大変な負担になっているのです。

元気に何事もなく登校してくれている方がいいと思うことは間違っていることではありません。子どもだってそう思っていることでしょう。

実は、このことが大切で、世の中のみながそう思っているから、余計に「ちよつぱり疲れた」と言えないのです。

こんな時

子育てをふりかえる

学校も家庭も子どもを育てることにはかなりません。

子どもを育てるとは、一言で言うとうと人間的に完成させ、ひとり立ちさせることを意味していると思えます。

もし、これまでの子育てがいわゆる「過保護」のためであるとしたならば次のようなことに留意してみてください。

- ①子どもの年齢や能力以下の扱い

はしてこなかっただろうか。子どもの側には「甘え」が育ちます。

②子どもが果たすべき責任を肩代わりしてこなかっただろうか。子どもの側には「やればできるの」にしようとし「意識が育ちます」。

③社会的な経験を奪ってこなかっただろうか。子どもの側には「社会的な未熟さ」や「要領のわるい」不器用さが育ちます。

④むやみに品物やお金を与えてこなかっただろうか。子どもの側には「果てしない物欲」の心が育ちます。

でも、やっぱり慌てないでください。子どもは、まだ人間を何年

もやってきていません。大人は、「自立への課題」なのです。

何十年も人間をやってきました。子どもたちが疲れていたら、そのことを解決してやることです。

長い教育、おそらく十数年間に一度や二度は学校に行きたくないことがあっても不思議ではない。このくらい大きく構えたらどうでしょうか。

「五月病」と言われるこの時期にあらわれる子どもたちの状況の中にある「自立への課題」こそが解決のための糸口なのです。

友だちとの交遊関係に原因を求めたり、一般的な環境の変化に原因を求めたり、教師の側に原因を求めたりしても問題は解決しません。

もちろん、それらに問題がある場合だってありますが、多くは「自立への課題」なのです。

ふるさと講演会

ふるさとを愛し、失われていくふるさとのわらべうたの研究、発掘に精力的に取り組まれております安藤千鶴子さんは、昨年の、これからの長寿社会に向かって歳を感じさせずに、生き生きと心豊かに活動している人に贈られるエイジレス賞を受賞されました。また、安藤さんは、本年米寿を迎えられます。これを祝して講演会を開催します。市民の皆さまのご参集をお願いします。

日時 5月16日(土)
午後2時~3時
会場 富士女性センター
3階大研修室
テーマ 「都留市の今昔」
連絡先 都留市郷土研究会
事務局 小林貞夫



☎(43)6916